密通

密　通

平岩弓枝

東京文芸社

密通　八九〇円
昭和五十年一月三十日発行

著作者　平岩弓枝
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
本　社　東京都新宿区西大久保三―二六
出張所　東京都新宿区払方町一番地
振替・東京二一七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0093―752112―5170
無検印承認

密通

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

目次

密通　五
おこう　三七
居留地の女　七三
心中未遂　一〇一
夕映え　一二九
江戸は夏　一五七
露のなさけ　一九五
菊散る　二二七

装幀　村上　豊

密通

一

表口に廻るのが億劫で、枝折戸を押した。狭い庭を横切るといきなり濡れ縁へ立った。

「あ、先生、お帰りなさいまし」

気配で出て来た内弟子が、慌てて手を突いた。常になく着流し姿である。よれよれの単衣から細っこい毛臑がのぞいている。

建部綾足（たけべのあやたり）は赫となった。唇がひくひくと痙攣した。

「何のざまだ。昼日なかから……」

浅草金竜山下の広くもない住いである。若い妻がこの内弟子と二人きりで留守をしていた筈だ。

手荒く障子を開けた。二、三日涼しい日が続いて、張り替えたばかりの紙の白さであった。

夫の声に驚いて、おこうが膝をあげかけた所であった。見覚えのある、内弟子の木綿の袴が妻の手にあった。
「なんだ。これは……」
突立ったまま怒鳴った。
血相が変っていたに違いない。
おこうは怪訝な眼をした。中腰になっている姿がひどく不安定で、なまめかしい。夫の視線を追うとお歯黒を笑いこぼした。
「茂三郎の袴でございますが、ひどく破れておりましたのでちょっと繕ってやろうと存じまして……」
成程、白い糸のついた針が袴の裾で光っている。針箱が出ていた。
「あの、どうか致しましたのでしょうか」
白々とした顔でおこうは童女のようにあどけなく夫へ訊いた。小首をかしげ、斜かいに夫を見上げた。見馴れた妻の媚態が今日は殊更、身ぶるいする程不快だった。
中腰のままおこうは袴から針を抜き、紅の口を近づけてぷつりと糸を切った。
茂三郎が無骨な手つきで茶を運んできた。おどおどとした恰好である。
綾足は妻の手から袴を引ったくった。汚いもののように内弟子の足許に放った。
「見苦しい。持って行け」
茂三郎は袴を取上げておこうに手を仕えた。
「奥様有難う存じました」

「うるさい。下っておれ」
唾でも吐きそうな表情でいらいらと手をふった。茂三郎は泣き出しそうな顔をして出て行った。
この春、出羽国大館の近くの綴子村という片田舎から出て来たのだから、まだひどく泥くさく野暮ったい。十九歳だというのに、子供子依していた。
おこうとどうこう出来るような相手ではない。疑いを持った事が笑止すらあった。
綾足は漸く肩を落した。口の中が乾いていた。おこうが乱れ箱を運んできた。着替えを手伝っている妻の髪の白髢甲の平打ちが艶かである。のぞけた襟法が桜色をしている。
体中に色っぽさが匂いこぼれる様な女である。玄人上りではない。生れつきそういう性質の女なのである。
気難しい顔を作って綾足は机の前へ行った。ふりかえらず、
「県居の……」
おこうは、いそいそと立って四角い風呂敷包を持って来た。夫の前で解く。半紙をとじた一冊を机の上に開いた。墨つきの柔かな文字だ。おこうの手蹟であった。日本橋浜町に居をかまえ、県居と称して門人を指導している国学者、賀茂真淵の講義を筆写したものである。おこうは昨年の暮から県居の門人になっていた。入門させたのは綾足の意志である。妻の学問のためではない。己れが入門を許されるまでの代理の心算である。建部綾足の妻女という身許を秘めておこうは知人の紹介で県居へ弟子入りした。
眉間に縦皺を深々と寄せ、綾足は書写本に見入った。十六歳の年齢に嫁いできて以来、一度も自分

から書物を読む姿を夫に見せた事のないおこうだったが、綾足は妻を自分の身代りに、国学の講義を盗ませにやることについて、少しの不安ももたなかった。字にも書にも一応のたしなみのある女だった。喰い入る様に文字を追う。おこうが写して来た以上のものを、綾足は妻の文字の裡から吸い取ろうとした。貪欲な切れの長い眼であった。

行燈の仕度をして、おこうは厨へ下りて行った。内弟子に水を汲ませる声がする。

調子に屈託がなかった。失が自分と内弟子とがどうこうしたと疑ったとは毛すじほども気づいていない。

綾足はちらと部屋の隅に目をやった。針箱が置き去りになっている。

人妻が夫の留守に若い男と同席し、相手の袴を脱がすというのが、どれ程重大な意味を持つか、町家育ちのおこうはつい迂闊に気づいていない。

（武家の妻女だったら、ただでは済まぬ）

武家の妻女、という言葉が彼の古傷に触れた。眉を顰めた。

かすかな衣ずれがしておこうが入ってきた。火打石を擦っている。

行燈に火を点けた。

なんでもないそんな動作にも妙に男心をそそるものがある。

綾足は目のすみで眺めた。

おこう自身意識してそうふるまっているのではない。自然に身についているのだ。

（意識してないだけに始末が悪い）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻の体にそうしたものがあるのを、綾足が気づいたのは夫婦になってからである。
どきりと胸をつかれたものだ。
妻以外にもう一人、こうした体つきの女を綾足は知っていた。取し返しのつかぬ事をしたと思った。綾足の心に或る不安がつきまといだしたのはそれ以来である。
表を水売りの呼び声が通った。商売帰りらしい。気のない売り声である。
僅かな風に軒しのぶの葉が揺れていた。

二

夕顔の垣根を折れた所で、綾足は背後から声をかけられた。
「これは加藤どのの御子息……」
相手は浅黒い精悍な額にうっすらと汗を滲ませ、若々しく会釈した。
「御無沙汰を致しております。父が一度お邪魔せねばと口癖に申してはおるのですが……」
並んで立つと背恰好は綾足と同じようなものだが、肩巾はがっしりと厚い。若いに似ず白地の蚊絣の黒の夏羽織という洒落た着こなしが身についているのは、父祖代々、町与力という育ちのせいかも知れなかった。
私用で黒門町へ行くというその加藤要人に連立って綾足は湯島聖堂の甍の見える坂道を下った。残暑はまだ続いていたが、日射しは秋のものである。遠く松の梢がすがすがしい。

「県居の事ですが……まだ先生のお許しが出ませぬが、父も折に触れお願い申しております故、その中には先生のお心も解けようかと……今暫く御猶予下さい……」

道々言い難そうに口籠る要人へ綾足は薄く苦笑した。

「いや、枝直先生も公務御多忙の身分、一介の俳諧師に、その御斛酌は無用でござる。もともと、身から出た錆ゆえ……」

切れ長な眼に自嘲が光った。

要人の父、加藤枝直はかつて大岡越前守配下としてきけ者といわれた辣腕の与力だが、一方、国学を好み中年から賀茂真淵に師礼を取っていた。俳句の席で知り合ってから格別昵懇というわけでもないが、綾足は意識的に年末年始の挨拶に自分から邸へ出向いていた。無論相手の職業なり地位なりを計算に入れての上だ。

県居へ入門の紹介を依頼したのは昨年の事である。建部綾足といえば俳人、凌岱としても画人、寒葉斎としても一応その道では名の知れている男だったし、国学は当時、流行のきざしは見えていたが、入門は官学と違って子弟の身分や家柄に拘束される事もなかった。賀茂真淵に師事して国学を学ぼうとした綾足の意志は容易に達せられる筈であった。紹介の労を取った加藤枝直は真淵とは長年の知己でもある。にもかかわらず、真淵が諾を与えないのは一にも二にも、綾足の毒舌の所為であった。

「俳論にしても、画論に於いても一流の見識を持つ男だが、どうしてああも敵を作りたがるものか……」

と彼を擁護する立場の枝直ですらが言い、
「弁口を以て人を傷つけ、快とする輩は……」
と真淵は婉曲に忌避した。加えて俳諧に於ける彼の過去が一層、真淵の心証を悪くしていた。
「諸方の俳諧師の許を転々としそれぞれに師事しながら、恩義を平然と泥足にかける、そうした忘恩の徒では……」
県居へ嵐を持ち込むようなものだと言う。
噂は要人も聞いている。だが彼は現在並んで歩いている綾足をそうした先入感で見ようとは思わなかった。与力という職業の上から父親が苦労して身につけた心がまえを、息子は天性の質として持って生れていた。
町並に入った所に古本屋があった。老舗らしく店構えも広い。掛け看板の下に横額に入った由緒ありげな一書幅が飾られている。綾足はふと立ち止った。要人も足を止めて、店を覗いた。
「こりゃあ、加藤様の若旦那様で……」
亭主とは馴染らしい。揉み手をしながら飛び出して来た半白の老人は要人の連れと見て、綾足にも小腰をかがめた。その背へ、さりげなく、
「これが、噂の軸か」
綾足が訊いた。
「へ、左様で……お書き下さいました大雅堂先生がどうしてもお明かし下さいませんので手前どもでも未だに何と読むやらとんとわかりません……早くどなたかに解いて頂きたいものでございますよ」。

亭主は相好を崩して笑った。
金泥で雲形を彩いた地に大雅堂独特の筆で漢字をぎっしりと書き散らしてある。
「だいぶ評判になりまして御聴堂帰りの若い方々がお立寄り下さいますが御解読なさる方がございません。出典は漢籍らしいとの事ですが……」
「ふん、赤児だましな……」
ついと綾足が歩き出した。口許に冷たい笑いが浮んでいる。亭主が聞きとがめた。
「もし……赤児だましとおっしゃいますのは……御判読なさいましたので……」
商売物を鼻の先であしらった風なのがひどく癇にさわったものらしい。
「承りましょう。一体、何と読みますので……」
綾足は要人をふりむいた。
「近松の浄瑠璃に桂川連理柵（れんりのしがらみ）と申すのがあるが御存知かな」
「さあ手前は……」
要人は生真面目に微笑した。笑うと歯が白い。亭主が傍から口を挿んだ。
「お半長右衛門の芝居でございましょうが」
「床本はあるか」
「へ……？」
「あれば、それを最初から読めばよい。それがこれだ」
軸へ顎をしゃくった。呆気にとられている亭主を尻目に要人へ言った。

「お半長右衛門の浄瑠璃を万葉仮名で書き散らしただけの事だ。大雅堂も人さわがせな御仁人ですな……」

薄い唇でひんやりと笑った。

県居の加茂真淵から入門を許すという知らせがあったのは、十日ばかり経っての事であった。使は加藤枝直の邸の者が来た。

「加藤様の御子息様がそれは熱心にお口添え下さいましたそうで……。貴方が大雅堂の書いた軸を浄瑠璃を万葉仮名で写したものと一目でお見破りになった事が県居では大層な評判でございますよ。それ程、古語古文に造詣の深いお人ならという事で入門のお許しが出ましたとやら……」

県居から戻ってきたおこうがいそいそと告げた時、綾足は庭の桔梗を写生していたが、唇にだけ、例の人を小馬鹿にした様な笑いが浮んでいた。

宝暦十三年九月、烏計非言（なんぞ非言を計らんや）という入門の誓詞を一札入れて、建部綾足は漸く県居門人に列した。

三

月の出の早い夜を選んで、綾足は加藤枝直親子を池の端吹上の料亭氷月へ招いた。県居入門の世話になった礼心である。

「殿方のお席へなまじ女の私なぞが……」
とおこうはしきりに同席を拒んだが、
「わしは席のとりなしなどは不得手だし、県居の事は其方のほうが詳しいのだから……」
なにかの話相手になるだろうと、綾足は有無を言わせず妻の仕度をせき立てた。
客は一人きりだった。
「父はあいにく如何ようにても欠かせぬお上の御用にて……。不参の無礼を重ね重ねお詫び仕れと申しつかって参りました」
綾足は不快を目の底だけで消した。背後に手をつかえているおこうを、
「手前、家内にて」
と紹介した。
顔を見て、要人は驚き、
「やはり……」
と呟いた。
「やはり……とは……?」
綾足は解せなかった。県居へ通っていたおこうが、建部綾足の女房であるとは、知る筈がないのである。加藤の邸へ、おこうを使に出した事もないし、要人は勿論、枝直も綾足の家を訪ねて来た事はない。
「実は……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com